

をするかが理解できていないことによると考えられる。そこでまず、身近な例を通して生徒の文法学習への抵抗感を取り除く工夫をし、文法学習の必要性和有効性を生徒自身に気づかせる必要がある。例えば、導入の段階で次のような例文を示し、2つの例文の間にどのような違いがあるのかを考えさせ、その違いはどこから生まれるのかを調べさせるという方法がある。

土手の桜は、もうすぐ咲きそうだ。  
土手の桜は、もうすぐ咲くそうだ。

かな文字の一つの違いによって動詞の活用形が異なり、接続する助動詞の意味・用法も異なり、文章全体の意味が異なってくることに気づかせ、興味を持たせていくのである。このような文例をカードに書かせ、その数を増やしながらか授業の中で随時活用させるようにしたい。

また、文法用語の意味の理解を定着させるために、次の例のように「活用形」や「活用の種類」などを意識させた短文を書かせ、生徒相互に話し合わせて発表させるなどの作業を入れると、より効果的である。

例 「言う」の連用形と上一段動詞の終止形をともに用いて短文を作りなさい。

## ② 「語句についての知識・理解」の指導

ア 小問例 ( )内の数字は全国比。平成7年度、平成9年度の順。

次の漢字の部首名をア～カの中から選びなさい。

- |     |          |
|-----|----------|
| 1 郊 | (74, 76) |
| 2 店 | (97, 91) |
| 3 補 | (98, 88) |

ア しめすへん	イ こざとへん	ウ ころもへん
エ おおざと	オ まだれ	カ がんだれ

### イ 考察

小問例から、生徒は、漢字の組み立てについての理解が不足していることがわかる。また、今回の調査で、漢字の読み書きに関して全国比が90未満の漢字が、小問の半数以上を占めることが分かった。【資料3】によると、漢字の書きについては、「既成」を「機成」と書いて「音だけ合っている字」にしたり、「同音異義語」や「部首が異なる漢字」を書いたりしており、つまずきが大きいことが分かった。また、その他の設問から、日常使っている漢字を書くことについても、漢字を読むことに比べ定着が十分でないことも分かった。漢字を読むことはできるが、その漢字を使用するまでの段階に到っていないと考えられる。